

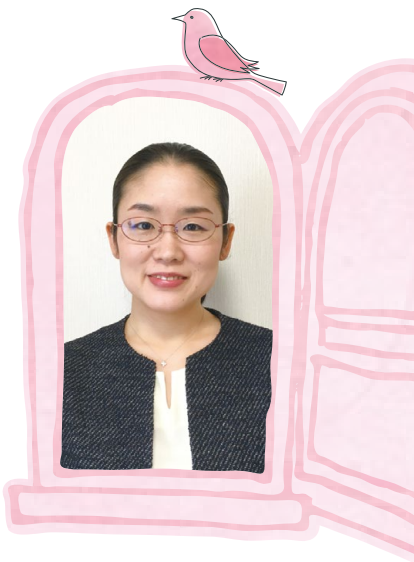
国語国文学コース



国語国文学コースとは

あらゆる時代の日本語、日本語の文学・文献を研究対象としています。つまり日本書紀、源氏物語からブログの言葉まで。言葉の研究は国語学、文学の研究は国文学とされます。言葉の用法を調べるには、文学作品を読んで用例を探ることになり、文学作品を正確に読むには、作品が書かれた当時の言葉の意味を調べるというように、両者は一体のもです。

山本先生の研究



准教授
やまもと まゆこ
山本 真由子先生

平安時代の漢詩文（漢詩と漢文）・和歌を研究しています。特に、これらの作品の表現の成り立ちや、特徴を明らかにすることが目標です。漢詩文と和歌とは影響しあっているので、漢詩文と和歌との比較も有効な研究方法になります。

近年は、漢詩や和歌の詠まれた宴会の経緯について記した文章「序」について研究を進めています。「序」は漢文でも、仮名文でも書かれています。序と漢詩・和歌をセットにして詳しく読むと、作品の表現の成り立ちや、特徴が明らかになります。また、平安時代の人々が文学をどのように捉えていたか、何を楽しみ評価していたかを考えることができますので、とても面白く感じています。

国語国文学コースを選んだ理由

昔から言葉の成り立ちについて調べることや文章の読み書きが好きでした。国語国文学コースはそのような興味を突き詰められ、私にぴったりであると考えたため選択しました。

国語国文学コースの魅力

一つの文章や言葉を見つめる、様々な視点が身につくことに魅力を感じます。国語国文学コースの専門科目では、各々が数行の文章や言葉についてじっくりと検討し、その後の発表および質疑応答を通して活発な意見交換が行われます。

卒論テーマ例

- ・「ある」と「をり」の歴史（上代から平安時代まで）
- ・式子内親王の「忍恋」と「夢」について
- ・司馬遼太郎の戦争体験とそれが作品執筆に及ぼした影響～『殉死』を中心に～

面白いと思った専門科目

「科目名」国語国文学講読Ⅱ
太宰治の代表作『人間失格』を数頁ずつ受け持ち、文庫、直筆の草稿、原稿を照らし合わせて精読する授業です。表現や語句の意味を吟味する作業が楽しいのはもちろん、草稿からは執筆時の作者の心情さえも伝わってくるようで、とてもわくわくしました。

『とびら』と『あ？』

「とびら」は、平安時代の仮名文字による文学には、ほとんど用いられない語である。土佐日記、源氏物語、枕草子などの作品には一例も用例がない。和歌でも古い例はなく、平安末期の歌人源行宗（一四三三年歿）が、「梅花簾に当たれり」の題を、「梅が香のたまらず匂ふことのみぞ柴のとびらのとりどころなる」と、梅花の香りがとどまらないことだけが「柴」で作った粗末な「とびら」の良い所であると詠う例が、現存最古の例である。柴は小さな雑木をいう。平安時代に「とびら」の語が無かったわけではない。承平四年（九三四）頃の漢和辞書『和名類聚抄』では、漢語「屣」に「止比良」の和名（日本の呼び名）を付ける。行宗の和歌の「柴のとびら」は、中国原産の「梅」の題に合わせて、中唐の元稹の「柴扉日暮れて風に随ひて掩つ」の詩句などで知られた漢語「柴扉」を訓読した語を詠むと考えられる。「とびら」は、漢文の訓読に用いられ、仮名の文学に用いる言葉では無かったようである。（文・山本先生）



3年生
きのした あみ
木下 愛美さん